

# 大谷學報 第十六卷 第一號

## 行の廻向より見たる本願

大須賀秀道

—

『大無量壽經』に説かれた彌陀の四十八願は、印度や支那の幾多諸聖に依り、念佛の宗教として體驗せられ、また論釋により解説が與へられた。されど其四十八願の見方としては、之を第十八の一願に統攝して、乃至十念の念佛行に救はれる願意と看做したことは、大體に於いて多數の見解の一致せるところであつた。

殊に眞宗七祖の傳統にあつては、之を稱我名字の誓願とすること、それが殆ど前後を一貫せる見方であつた。中にも道綽善導の教系にあつては、他の聖道の諸善萬行に對して、念佛一行の專修專念が高調せられたので、『大無量壽經』に於ける本願の宗教は、一に稱名念佛の行に救はれる宗教となつた。これを繼紹して更に諸行念佛の廢立を明かにし、選擇本願の念佛を標榜せるもの、即ち法

行の廻向より見たる本願

—

—

然聖人が日本に創建せる淨土宗であつたこと、淨土教史上既に顯著な事實である。

然るに祖聖親鸞の眞宗にあつては、新に第十八願の三信に他力救済の深旨を發見し、之を本願三心之願又は至心信樂之願と名づけて、念佛の行は之を第十七願に別開せられた。予輩曾て「三願轉入と二願分開」と題し、本學報(一三)に聊か其の別開の旨趣とそれより展開せられた『教行信證』六軸の機構に就いて、聊か卑見を開陳せしことがあつた。而して當時已に留意せるが如く、此十七十八二願の關係は、その見方の如何により、直に行信二法の見方の内容が規定せられるのであるから、行信論の檢討に對しては、先づ如實に二願の交際を考察することが要求せられる。勿論行信二法の見方の如何によつて、二願の見方の内容が規定せられることゝもなるであらうけれど、先づ二願の關係より其考察を進めることが、研究としては自らの順序であらう。

## 二

從來四十八願の見方について、元祖は一願該攝の立場であり、宗祖は五願分相の立場であると解せられてゐる。如何にも『選擇集』本(二九)四十八願之中既以念佛往生之願而爲本願中之王也と、第十八に王本願の目を與へ以て餘の四十七願を統攝する義を明にしたのは元祖であり、それから第十八は生因の願、他の四十七は欣慕の願と分けられることゝなつた。されど此は善導の『玄義分』(一八)時發四十八願一一願言若我得佛云云や『法事讚』上(一四)の弘誓多門四十八、偏標念佛最爲親に據

られたことは言ふまでもなく、『易行品』<sup>(八)</sup>阿彌陀佛本願如是若人念我稱名の文や『淨土論』の觀佛本願力の語に徴すれば、龍天二聖既に其微旨あり、況や『安樂集』上<sup>(三六)</sup>稱我名字若不生者を以て本願の可通入路を代表せしめ、『往生要集』<sup>(二下本ノ)</sup>四十八願中於念佛門別發三願といふが如き、一願該攝の義は七祖に一貫して、孰れも第十八願中心の本願觀を持するものと言うてよい。

たゞ『論註』卷末に於ける三願的證は、偶ま宗祖が五願分相せる根據と見らるけれど、それは單に十八、十二、廿二の三願的證であつて、未だ第十七願は引證せられてゐない。爾るに宗祖が五願分相せる『廣本』六軸の機構は、その展開の樞軸が十七十八二願の分開に置かれるから、五願分相の中でも、特に十八十七の二願分開にこそ宗祖獨創の本願觀が見出されると言うてよい。されば七祖悉く第十八願に念佛救濟の願意を認めて、之を四十八願の統攝的王位に置いたけれど、第十七願は單に欣慕の願として、他力救濟の上にそれ程に重要な意味あることを認めなかつたに係らず、宗祖が第十八願の願事たる行信二法の中、七祖悉く念佛往生の願として重視したる行の一法を移出して、之を第十七願の地位に据えたことは、宗祖の本願觀としてそこに何等か重要な意味あることが看取せられ得る。

従ひて宗祖が、七祖傳統に於ける該攝一願の第十八の内容から、新に第十七願を開出して、これに行としての救濟を認めたといふことは、單に第十八を信成就の願としたから、行の遣り場がなく

て仕方なしに之を第十七の所願としたといふことではあるまい。また第十七の願文に稱我名者の名の字があるから、乃至十念の念佛を法體名號に引き上げたといふだけのこともなからう。少くも宗祖が從來の傳統的の見方から離れて、斯る獨創の見解を建てられたからには、そこに何等か眞宗教義としての重大な意味と、その必然性が見出されなくてはならない。

### 三

此の二願分開の由來を、宗祖の三願轉入の體驗に認めて、三願に於ける要眞弘三門對の批判は、自ら第十八を信成就の願と見るこゝとなり、行の成就是第十七に置かれるこゝとなつたといふこと、予輩の曩に論證せる所であつた。二願分開の由來については、この論證が容さるゝとしても、行の成就を何故に第十八願に置かずして、第十七願に置かれたかの理由に就いては、更に其考察が要求せられる。

大體十七願は、宗祖がこれに諸佛稱揚之願、諸佛稱名之願、諸佛咨嗟之願といふ如き願名を與へたやうに、願の當相としては單に十方諸佛に我名を咨嗟し稱揚せられやうと誓はれたのに過ぎない。「稱名」とあるはあつても、それは諸佛稱讚の名號であつて、衆生の稱名でも念佛でもない。所謂能行の稱名念佛は、第十八に念佛往生の願名が與へられた乃至十念の念佛に外ならぬのである。それによつて宗祖は『行卷』の卷頭に大行者稱無碍光如來名斯行即是云々と、行を定義するに能行稱名

の形式を以てし、爾者稱名能破衆生一切無明云と行益を結歎せられたのであらうか、同じ稱名ではあるが、願文は諸佛の稱名、祖釋は衆生の稱名と、全くその内容を異にしてゐるから、これを古來學者が所行だとか法體名號だとか、さまざま説明を與へたは與へたが、そこに尙ほ解けざる學徒の惱みがある。

これには先づ何が故に行を分開して第十七願においたかの理由から考察せなくてはならない。即ちこゝに私は宗祖の第十七願の見方から出發して、此の疑問を切實に解説する方法を採りたい。既に『行卷』に「諸佛稱名之願」と標舉せる限りは、宗祖が行を第十七願と定められたのは、それは願文を其文字通り見てゐられるのであつて、諸佛稱名とある限り、それが直に名號成就の願でもなく、所行法體の願でもないことが知られる。然らば「諸佛稱名」といふことに、如何にして行としての意味が見出されるであらうか。それに就いては先づ此下の『六要鈔』に

諸佛稱名願者是第十七願也、是則說爲往生行之名號願故當卷出之、凡於四十八願之中此願至要、若無此願名號之德何聞十方聞而信行此願之力、若無此願超世願意諸佛何證依證立信又此願恩也

と、此に存覺師により第十七願を『行卷』に出せる理由が平明に註解せられてゐる。この説明に従へば、四十八願の中、第十八願が至要なる如く、第十七願亦甚だ至要である。それは衆生往生の行た

る名號が此願で說かれるからで、而もそれに十方聞信と諸佛證誠との二義を以て願の力恩を顯彰せられた。此『六要』の註解は行を第十七願とせる理由が隨分と明瞭にされてゐるのであつて（一）此願に由つて往生の行たる名號が諸佛によつて說かれること（二）諸佛が名號を讚嘆するので衆生が聞いて信すること（三）諸佛が證誠するので衆生が證に依つて信を立てること、いふ三の理由が擧げられてゐる。これら孰れも第十七願の持つ至要な意味であるに相違ないが、たゞ行を第十七願とせる理由としては、如何な解説が與へらるべきであらうか。

#### 四

四十八願の中、名號といふことの初めて出たのは、如何にも第十七願である。鈔主がこれに爲往生、行之名號と註解を施した所に從へば、稱我名者の名に衆生往生、行といふ行の意味が一應見出されぬこともない。

併し之を嚴密に言へば、六字は彌陀の佛名であつて、之に行の名を與へるには、何等かの説明を要する。即ち其名號が第十七願では未だ諸佛讚嘆の言中にあれば、衆生能行の稱名でないから、昔から様々に解説を與へやうとした。或は衆生の稱ふべきものとして成就したから之を衆生の能稱に從へて所稱の名號に早く行の名を與へたとか、或は六字の體が行を内容として成立するから名號に行の名を與へたとか、何等かの説明が附會せられなくてはならない。されば斯る解説によりて名

號の行たることは認められるとしても、第十七願には往生の行たることは未だ顯れず、それが衆生の行たることは、第十八の念佛往生の願に至つて現れてゐることは否定し得られない。それ故『六要』も諸佛が説爲往生行名號願故（オツルノ、オヲナルニ）と言うて、更に若無此願名號之德何聞十方（クハ、ツケン、ニ）云と別に第十七願としての其願功を宣揚せられた。若も諸佛稱名の名の字のみに行の義を認めて、第十七の願功たる諸佛稱揚や諸佛咨嗟に、何等行の義を認めないといふことは、それが公正なる見方でないばかりか、宗祖所立の願名をも無視することゝなる。

それゆゑ行を第十七願に配した理由に就いては、更に新に考へ直されなくてはならない。既に第十八願から行の分相された由來は、三願相對の要眞弘細判にありとしたが、それは信に對する絶對他力の純化がその基調とせられた。而して其純粹他力が願力廻向を内容とすること勿論であるが、予輩の所見では行を第十七願に分相せる理由は、行の願力廻向の相を斯の願に認められたものであると解したい。即ち『六要』に於ける十方聞信の義も諸佛證誠の義も、孰れも斯の願の諸佛稱讚に於ける願功であるが、それが其儘に十方衆生に對する廣施功德之寶の回向の相でなうて何であらうか。されば『行卷』の引文、正依と異譯とに亘りて、名聲塵所聞とか說法獅子吼とか廣濟貧窮とかの多數要文が引用されてゐる。是等の經說恐らく大悲廻向の義を彰されたものと見るべきであつて、第十八願から行を開出して之を第十七願の位置に配せるもの、行に於ける願力廻向の相を斯の

諸佛稱名の願に認めたものと考へることは、何人も之を首肯し得ることであらう。思ふに第十八願に於ける乃至十念は、衆生の機に行ずる念佛である。故に他の諸師は誤つて、之を自力策勵の行業とした。宗祖が三三法門の批判も、その目的は自力の行を捨て、他力の行に皈せしめんか爲であつた。然るに行の廻向の相は之を第十七願に見るに最も明かに打ち出されてゐる。これ宗祖が諸佛稱名之願に他力大行の廻向成就を認められた所以でなくてはならない。

されば宗祖が斯の願に對して、特に往相廻向之願といへる總名を與へたのも、先哲孰れも説明するが如く、それは「南無阿彌陀佛の廻向」として、第十七願の諸佛稱名に廻向の力を認めるからであり、又大悲願の呼ばれたのも、全く是れ如來の大悲廻向が殊に斯の願によつて達成せられるからである。而して『略本』には、行下に於いて諸佛咨嗟、諸佛稱名、往相正業といふ願名を列ねた後に、然本願力廻向有<sub>二</sub>種<sub>一</sub>相<sub>二</sub>者<sub>一</sub>往相二者還相と茲に改めて二廻向を開出して、行信二法共に之を行下に統攝せられたもの、また以て如來の利他廻向を第十七願に見出せる宗祖の感銘が述べられる。それ故行を第十七願に配せしは、單に名號が斯の願に初めて現れたといふのみではなくて、斯く諸佛の讃嘆によつて名號の衆生に聞信せられるところが、即ちこの行の如來清淨願心に廻向成就せられた相であると思はなくてはならない。従ひてまた斯行者出<sub>二</sub>於大悲之願<sub>一</sub>の「出でたり」とは、斯の他力の大行は第十七願から廻向成就せられることを意味するものであつて、そこに選施功德寶といひ廣



濟貧窮といへる如來の大悲の表現せられる所と看做してよい。行を離れて廻向なく、廻向を離れて行はないのであるゆゑ、第十七願が廻向の願であるとすれば、こゝに宗祖が第十七願を行の願と見られた理由とその必然性が見出される。

## 五

更に第十七願に於ける行の廻向には、教の廻向の附隨せることを忘れてはならない。教行信證の四法凡てこれ往相廻向の内容なれど、所謂四法三願にして、其中行信證の三法各能廻向の願あれど教に限つてそれが往相廻向に屬しつゝ、而も能廻向の別願がない。是れ第十七願が諸佛稱名の願であるといふことは、それが行に就いての能廻向の願でありつゝ、一面にまた教についての能廻向の願であるといふことと見られ得る所である。されば教に能廻向の別願なしとするも、之を第十七願の願功に歸することに由つて、行が眞實行たると同時に、それに附隨せる教も亦眞實教たり得るのである。

かくも第十七願に於ける行の廻向が、その一面に於いて教の廻向であり、こゝに眞宗の教行に眞實の成立根據の與へられるといふことは、二願分開の理由として大なる意義を持つ。何となれば『大無量壽經』は釋尊の説かれた經典ではあるけれど、第十七願から見れば、それは他の聖道の經典の如く單なる釋迦一佛の所説ではない。その大寂定に入つて光顏巍巍たる相で説けるは、それが彌陀佛を背景とせるばかりか、去來現佛々佛相念の境にあつては、諸佛を完うして念ずる彌陀三昧で

あつた。従ひて出世の本懷といふも、釋迦一佛の出世本懷ではなくて、三世諸佛の出世本懷たること『一多證文』(一九)に「如來とまうすは諸佛をまうすなり」の御釋に祖意の在る所が窺知せられる。

爾れば『大無量壽經』が「眞宗之教」として教權の與へられることは、それが單に釋迦の説であり、釋迦出世の本懷たるが故のみではない。その眞實救済の力を持つといふことは、第十七願の誓約に酬ひて、十方の諸佛が彌陀の名號を讃嘆するからであつて、そこに眞實教が彌陀往相廻向の内容たる意味を持つ。前に出せる『六要』の釋に、第十七の願功として、十方聞信の義と諸佛證誠の義を出し、聞いて信ずるも此願の力とし、證に依つて信を立つるも此願の恩なりと言へるもの、それが所聞所信の教であると同時に、それが即ち以佛名號爲經體也と言はれる名號としての教の本質であり、また一面には如來尊號甚分明、十方世界普流行〔五會法事讚行卷所引〕と言はれる行の行たる所以でなうて何であらうか。

故に『教卷』の結歎には、前に引ける五德現瑞や出世本懷の經説を指して、則此顯眞實教明證也といひ、而も十方稱讚之誠言と造語せるもの、また此の理由に外ならず、それは第十七の願功を離れて眞實教の義の理解し得られるものではない。而もまた教を速疾圓融之金言と歎せるもの、之を『總序』の圓融至德嘉號と對照すれば、教と行とは其廻向の義の內面的に一致せることが影顯せられてゐる。されば宗祖の『教行信證』に於ける機構として、行が第十八願から移出せられて、第十七願

に其位置を占むる所以のもの、十九二十の兩願に於ける自力の行に對して、他力行の由つて出づる廻向の根據を明かにし、更に眞宗の教ける教も亦行の内容として廻向せられるところに、眞實教の本質を開顯せられたものと看做してよい。

## 六

上來煩を厭はず、第十七願に於ける行の意義は、如來から衆生への廻向を主義とすることを明かにした。然るに其第十七願の廻向といふことは、諸佛の讚嘆によつて、名號六字を衆生に施與することゝ考ふべきか、或は又名號六字其物によつて、令諸衆生功德成就せしめることゝ考ふべきであらうか。若し本願力の廻向によつて、往相の大作として衆生に名號六字が施與せられるとすれば、機に領受せられるは南無阿彌陀佛その物であるといふべく、若し又「南無阿彌陀佛の廻向の、恩徳廣大不思議」として、名號六字の内容が廻施せられるとすれば、機に領受せられるは、即ち信であると言はなくてはならない。

同じく第十七願に於ける廻向の行ではあれど、その行の廻向に對する斯る二つの考へ方は、自ら行その物の上に二様の見方が生ずる。即ち前者のやうに諸佛の讚嘆に廻向の力を認め、それによつて廻向せられるが名號六字とすれば、吾人の領受せる名號もまた稱無碍光如來名といへる稱名でなくてはならない。こゝに行を口稱の念佛と見る能行派の見地が置かれる。されど後者の如く諸佛所

讚の六字の内容として、その行が信心の相で機の上に領受せられるとすれば、自ら名號は所聞所信として法の方に置かれねばならない。即ちこの行を法體の名號と見る所行派の見解は、この様式の見方であると言うてよい。故に宗祖が行を第十七願の廻向と見られたその廻向の意味は、これを能行と所行と兩者の何れにあると判定すべきであらうか。

されど名號廻向に對する此の二様の見方は、決して對立して相容れないものでないばかりか、却つて此の二様の見方の存する所に、名號廻向の機能が達成せられるものと考ふべきではなからうか。何となれば若し第十七願につき假に能讚所讚を分てば、諸佛は能讚であり、名號は所讚である。その能讚に廻向の力を認むれば、衆生に廻向せられるは名號にして、それは第十八願の乃至十念として領受せられる。故に所廻向の行は、衆生の機に於ける能行即ち稱名として考へられるを自然の約束とする。されど諸佛の能讚が、それをして能讚たらしめるのは、所讚の名號を本質とせるによる。若も名號を離れたら、諸佛の能讚も能讚たり得ず、それに廻向の力があるとは考へられない。それ故此の名號が諸佛の能讚にあつても廻向の本質たれば、聞其名號信心歡喜といひ、其佛本願力聞名欲往生とあつて、衆生が諸佛讚嘆の語を聞くは、即ち名號を聞くのである。またそれと同時に衆生の機に廻向せられたる信心、その體本來至徳の尊號に外ならず、一流安心の體といふも南無阿彌陀佛の六字のすがたなりとすれば、六字を離れて信心の受得せられるものでない。それゆゑ六字

は、能廻向でありつゝ而も所廻向であり、法にあつても六字、機にあつても六字、所謂能所不二、機法は一なればこそ、こゝに十七願の廻向の妙用が達成せらるゝものと看做し得られる。

されば圓融至徳の嘉號にあつては、諸佛稱名と衆生の稱名と二つであつて二つでない。何となれば、名號は「南無阿彌陀佛の廻向」として、それが法にあつて能廻向でありつゝ、而も機にあつて所廻向の信心の體である。『六要』の十七十八更不相離行信能所機法一也と言へる所以も、亦一に此に在る。故に『行卷』にあつて、稱無碍光如來名の行が大悲の願より出でたりといふことゝ、六字釋の中の言<sup>ツ</sup>發願廻向者如來已發願廻<sup>シテ</sup>施衆生行之心也とは、これを二つに引き離して考ふべきでない。由來、法といへば如來の手下にある客觀的對象とのみ考へるのは、餘りにそれが單純な見方ではあるまいか。「眞實信心の稱名は、彌陀廻向の法なれば」と、機法一體の立場にあつては、如來の方にあつても機は機であり、衆生の方にあつてもまた法は法であると考へらるべきである。そこに廻向の妙處があり、六字に救濟の機能が見出される。少くとも第十七願に於ける行の廻向とは、能所不二機法は一の意味でなくてはならない。

## 七

この廻向を離れて、本願もなく他力もないのであるから、十七十八二願の關係も、行信二法の關係も共に此の廻向原理を基調としてこそ、その考察が眞宗學の上に正當の意味を持つ。

而して此の廻向から見たる十七十八願の關係としては、先づ『廣本』の綱格として『行卷』『信卷』が各卷を異にして對立する立場にあつては

行——第十七願廻向——『行卷』——行信次第

信——第十八願廻向——『信卷』——信行次第

といふ形式となつて、第十七願廻向としては行に救はれる宗教であり、第十八願廻向としては信に救はれる宗教である。従ひて行にも絶對の救濟あり、信にも亦絶對の救濟あり、而もその行には念佛行者必可具三心と必ず信を具し、又信には眞實信心必具名號と必ず行を具することとなる。是れ即ち往相廻向の内容として絶對的な大行であり大信であつて、行信二にして而も一なるもの、即ち本願力救濟の兩面に外ならぬのである。

されど行に信を具し、行に信を具するとは、行信の體からいふ場合である。即ち其具體的内容としては、行體に信を具し、信體に行を孕み、一體兩面表裏の關係をなせること言ふまでもない。爾るに行信不離とか二願不離とかいふことは、體に於ける絶對的の見方でなく、寧ろ相に於ける相對的の見方であると考へてよい。故に若し之を機法相對せる廻向の相對的な見方で言へば、第十七願は能廻向の法であり、第十八願は所廻向の機である。それは

第十七願——法——名號——能廻向

第十八願——機——信——行——所廻向

といふ如き形式となつて、此に二願は自ら機法相對して、能廻向と所廻向との相を認めざるを得ないこととなる。即ち前の場合では、機も絶對不二の機であり、法も絶對不二の法であつたものが、此に一轉して、相對の機法の上に廻向の相が認められることとなる。而して此の相對の形式は、これを從法向機の廻向から見れば、十七十八の二願は、能廻向と所廻向との關係であれど、若も更に之を從機向法の立場から言へば、

第十七願——名號——法——所行

第十八願——信心——機——能信

といふ形式となつて更に所行の法、能信の信といへる機法主客の對立せる關係と見られることとなる。若し願成就に於ける聞其名號信心歡喜に二願考察の基準をおけば、この行信能所機法の關係も、之を一念發起の内容として重要視せねばならないのである。

之を要するに、行信と二願との交際、從來の學說甚だ複雑煩瑣にして、學徒を悩ましめるものがあるけれど、既に行信二法は往相廻向の内容であり、而も其廻向は懸つて十七十八二願にあるとすれば、その考察は必ず廻向を主義とせなくてはならない。而も其の廻向は、主として第十七願の願功であれば、その廻向の意味から、二願の交際と行信の關係との規定せらるべきは、亦必然の理であると言つてよい。

然るに行の廻向を主義として考察すれば、行信と二願との交際に、上に述べた如き三の形式が認められるのであるから、此の見解の下に、從來の多種多様な學説を批判し、これを整理し得ることゝ信するけれど、今は行の廻向より第十七願に行の成就を認めた理由に予輩の考察を止めて、そは他日の評論に譲ることゝする。